

岸なみの活動に基づく教材「たぬきの糸車」の読みの可能性

濱千代 いづみ

The Possibility of Reading of “Tanuki no Itoguruma” Based on the Activities of KISHI Nami

Izumi HAMACHIYO

Abstract

This paper investigates the activities of KISHI Nami, then raises the possibility of reading of “Tanuki no Itoguruma”. The results are as follows :

1) KISHI Nami made the works as an editor and a writer in order to give the girls deep culture, noble hope, and great happiness.

2) At first KISHI Nami wrote some articles of the magazine “Shojo no Tomo” under the pen name of ADACHI Toyoko, but later she wrote a story and the articles on her family under the pen name of KISHI Nami.

3) “Izu no Minwa” was the literature of nostalgia for KISHI Nami. She intended to rewrite folk tale into children's story. She achieved the goal of rewriting “Tanuki no Itoguruma”.

4) KISHI Nami and her brother were close. Her brother was called into the army and did not return home. Tanuki's skillful hands correspond to her brother's hands that she remembered. The possibility of reading of “Tanuki no Itoguruma” is that KISHI Nami made her brother come back under the guise of a lovable tanuki in the story.

Key words

KISHI Nami, “Tanuki no Itoguruma”, ADACHI Toyoko, “Izu no Minwa”, brother

1 はじめに

教材「たぬきの糸車」は、光村図書出版が発行する小学校1年生向け国語教科書に掲載されている。教師用指導書には、岸なみ編『伊豆の民話』（1957）収載の「たぬきの糸車」を、岸なみが小学校1年生向けに再話し直した旨が記してある^(注1)。教材としての歴史は長く、昭和52（1977）年度版に初めて掲載されてから、平成27（2015）年度版に至るまで、継続して採用されている^(注2)。

話の概略は次のようである。

たぬきがきこりの家へやって来て、いたずらをするが、おかみさんは糸を紡ぐ真似をするたぬきをかわいいと思うようになる。そして、わなにかかったたぬきを逃がしてやる。冬の間きこり夫婦は山を下る。春になって山に帰って来ると、板の間には糸の束が積んであった。糸を紡いで束ねていたたぬきが、おかみさんに見られたのに気がつく、うれしそうに帰る。

て行った。

この教材の読みについて、現在指摘されている事柄を整理すると、次のようになる。

- (a)『伊豆の民話』収載話の最終部「たぬきは、おかみさんのために、一年中の糸を、みんなつむいでおいてくれたのでありました。」が教材「たぬきの糸車」では削除されている。これによって、教材「たぬきの糸車」では、たぬきの糸紡ぎが報恩行為であるという意味合いが薄くなり、おかみさんとの心の交流という読みが前面に出てくることになった^(注3)。
- (b)「たぬきの糸車」は、おかみさん自身の心の中に起こるドラマを描いた物語である。たぬきの目玉・シルエットは、おかみさん自身の見る能力の裏面を指している。糸を束ねるたぬきの様子は、おかみさん自身の、過去から未来に渡る生の本質的な姿の肯定的な確認と捉えられる^(注4)。

(a)は主として教育現場の指導者たちから出ている指摘である。教育現場における読みとして適切であると考え、(b)は話が生まれる時の人間の意識という視点にたち、類似の昔話との比較を通して出ている指摘である。

岸なみに関しては、『日本児童文学大事典』に載る概略ほどのことしか紹介されていない。本稿では、まず編集者から再話者・翻訳者に至る岸なみの活動を記述する。次に岸なみの活動や郷里の人々に関わらせることで見えてくる教材「たぬきの糸車」の読みの可能性を提示する。以下、表記について一部を除き、旧字体を新字体に直して示すことにする。

2 岸なみと「こまどり書苑」

『日本児童文学大事典』及び新聞記事によると、「たぬきの糸車」の再話者である岸なみは、本名を土子登代子という。明治45(1912)年3月に静岡県伊豆に生まれ、平成27(2015)年7月に老衰のため103歳で亡くなった。静岡英和女学校(現静岡英和女学院中学校・高等学校)を卒業し、『伊豆の民話』ほか民話の再話を手がけ、ラスキン『黄金の河の王様』(1950 中央公論社)ほか多くの海外児童文学を翻訳抄訳した^(注5)。

岸なみの単行本としては、このラスキン『黄金の河の王様』の翻訳が最初である。その「はしがき」に、ラスキンとの出会いが16、7歳ころのことで、銀座のラスキン・ホールでもらったノートにラスキンの言葉が印刷されていて「心にしみ」、「成長するにつれて、さらに味わいふかいものとなっ」たことが書かれている^(注6)。ラスキンの児童文学はこの作品のみで、それをいち早く紹介したのが岸なみである^(注7)。

岸なみは再話者・翻訳者として知られているが、数々の翻訳書の出版より前に、編集者として活動し、「こまどり書苑」という発行所を運営していた時期がある。次にあげる3本は「こまどり書苑」から「土子豊子」によって発行された^(注8)。

「こまどり書苑」より発行の本

本郷眞(1948)『オオレリヤの花束』

ドッチ原作・中村妙子訳(1948)『銀のスケート』

江間章子(1949)『乙女のよろこび』

『乙女のよろこび』の「あとがき」で、江間章子は次のように記している。

「少女の友」編集部で、岸なみさんのペンネームや足立豊子さんのお名前、いままで少

女たちのいいお姉さま、すてきなお母さまだった土子さんが、少女たちにいつそう深い教養と高貴な希望と大きな幸福を与えようと「少女の友」を辞されて、出版を始められました。そして私に少女のために小説を書くようにとおっしゃるので、書きあげたのがこの『乙女のよろこび』です。

この「あとがき」にある『少女の友』は、明治41（1908）年創刊の実業之日本社が発行していた少女向け月刊雑誌である。少女の人気を集め、昭和6（1931）年末、内山基が主筆になり、抒情性の中に文化的香気の高い誌面を作った。第2次大戦後も抒情と教養の編集方針の維持に努めたが、昭和30（1955）年に終刊した^{（注9）}。

「あとがき」によると、岸なみはその編集部にも勤めていた。しかし、「少女たちにいつそう深い教養と高貴な希望と大きな幸福を与えようと」自ら発行者になったのである。「こまどり書苑」から発行された3本には、題名の前に「少女小説」という言葉が置かれている。良質な作品を少女に提供しようとした意気込みが伝わってくる。

ところが、「こまどり書苑」は長く続かなかったようである。先ほどの3本の発行は昭和23（1948）年12月から昭和24（1949）年1月までに集中しており、その他に「こまどり書苑」から発行されたものを見ていない。また、昭和25（1950）年には岸なみ自身が翻訳者となって、岸なみの筆名でラスキン『黄金の河の王様』を中央公論社から出している。その後もバウム『オズの魔法つかい』（1951 講談社）、スターリング『王女ナスカ』（1954 講談社）など多くの翻訳書を他の出版社から出している^{（注10）}。

以後、良質な作品を少女に提供する活動は続き、民話の再話を公開することによって対象とする読者層も広がっていった。

以上をまとめると次のようになる。

- （a）岸なみは再話者・翻訳者として知られているが、それ以前に『少女の友』の編集部にも勤めて編集者であった時期があり、発行所「こまどり書苑」の運営者であった時期がある。
- （b）岸なみは「土子豊子」の名前で発行所「こまどり書苑」を運営し、昭和23（1948）年12月から昭和24（1949）年1月までに少女小説を3本発行している。
- （c）岸なみは良質な作品を少女に提供することで「深い教養と高貴な希望と大きな幸福を与えようと」志した。

3 岸なみと『少女の友』

『乙女のよろこび』の「あとがき」にあるように、岸なみは雑誌『少女の友』の編集部にも勤めていた。ここでは、岸なみの活動を『少女の友』に掲載された文章によって見ることにする。『少女の友』における「岸なみ」及び「足立豊子」の筆名の記事を取り出して列挙すると表1のようになる。なお、「土子豊子」の筆名の記事は探したが、見つからなかった。

『少女の友』に記事の掲載された期間は、昭和22（1947）年4月から昭和23（1948）年10月までの1年7ヶ月である。⑮番の記事を最後に、岸なみは『少女の友』の編集部を辞職した。そして、こまどり書苑を立ち上げ、昭和23年12月には少女小説2本の発行に至っている。

題目からでは内容の判別しにくいものもあるので、いくつかについて簡単に紹介する。

①番「お留守番の日」は、母親の留守の日に子どもが食事を作るという設定で、炒めご飯とすまし汁の作り方が載っている。②番「たのしいお弁当」では、菊かぶと炒り野菜の作り方が載っている。⑥番「秋のお魚」はお弁当の副菜にするため、さばの磯あげの作り方が載っている。⑧

番「私たちのお正月」には、一口饅頭の作り方が載っている。④番「果物をたべましょう」、⑤番「ヴィジタブル・サンドキッチ」、⑥番「秋のお魚」、⑧番「私たちのお正月」の4つの題目は、目次ページに「お料理の頁」という断りが付いている。

⑩番「春の髪」には、洗髪のしかたが載っている。⑪番「二人の乞食」は2人の物乞いが心を通わせる話で、ページ下に「ある時代のある所の話」という見出しが付いている。⑫番「姉より妹へ」には「読書について」という副題が付き、学生時代にどんな本を読んだらよいかという案内が、姉から妹への手紙の形式で語られている。

表1 『少女の友』における岸なみ・足立豊子筆名の記事一覧^(注11)

番号	巻(号)	年-月	題目	筆名	ページ
①	40(4)	1947-04	お留守番の日	編輯局 足立豊子	58-59
②	40(5)	1947-05	たのしいお弁当	編輯局 足立豊子	38-39
③	40(6)	1947-06	おいしいおやつソフト・ビスケット	編輯局 足立豊子	32-33
④	40(7)	1947-07	果物をたべましょう	編輯局 足立豊子	56-57
⑤	40(8)	1947-08	ヴィジタブル・サンドキッチ	編輯局 足立豊子	54-55
⑥	40(9)	1947-09	秋のお魚	編輯局 足立豊子	52-53
⑦	40(12)	1947-12	ピーナッツロック	編輯局 足立豊子	44-45
⑧	41(1)	1948-01	私たちのお正月	編集局 足立豊子	54-55
⑨	41(2)	1948-02	手を美しく	岸なみ	40-43
⑩	41(4)	1948-04	春の髪	岸なみ	40-43
⑪	41(5)	1948-05	二人の乞食	岸なみ	18-21
⑫	41(5)	1948-05	姉より妹へ	足立豊子	40-43
⑬	41(7)	1948-07	美しくなるために	足立豊子	48-51
⑭	41(9)	1948-09	楽しいお八ツの作り方・みつ豆 ^(注12)	足立豊子	裏表紙裏
⑮	41(10)	1948-10	美しい顔・美しい肌	岸なみ	54-57

表1の記事は、内容によって料理に関わるもの、美容と健康と身だしなみに関わるもの、読み物、読書のすすめに分けることができる。

表2 記事の分類

内容	記事の番号
料理に関わるもの	①～⑧、⑭
美容と健康と身だしなみに関わるもの	⑨、⑩、⑬、⑮
読み物	⑪
読書のすすめ	⑫

料理に関わるものは、少女にできるように料理をする方法が書かれ、実用的な内容になっている。裏表紙裏に位置する⑭番「楽しいお八ツの作り方・みつ豆」以外は見開きの2ページで、「編輯(集)局」という部署名と「足立豊子」の筆名がある。

美容と健康と身だしなみに関わるものは、手の手入れ(⑨番)、洗髪(⑩番)、健康保持(⑬番)、肌の手入れ(⑮番)の方法が書かれ、料理の場合と同様に実用的である。分量はどの題目も4ページに増加している。

ところで、⑨番「手を美しく」と⑩番「春の髪」では本論に入る前に、書き手自身の家族に関わる事柄が導入として利用されている。前者では「私」の「お母さん」と「弟」が登場し、後者では「伊豆のふるさとの家」が設定され、髪を洗う「母」が登場する。この2編は昔日を回顧する形式をとり、「岸なみ」の筆名を使い、他と比べて異質である。

⑬番「美しくなるために」では「私の大きなお姉さまの1人娘の睦代ちゃん」との会話の形式を、⑮番「美しい顔・美しい肌」では「はるなちゃん」への返信の形式をとりながら、美容と身だしなみの助言をする。前者が「足立豊子」、後者が「岸なみ」の筆名になっているが、その使い分けは分明でない。後者が『少女の友』に見られる最後の記事であるので、筆名を固定したのかとも推量される。

読み物の⑩番「二人の乞食」と読書のすすめの⑫番「姉より妹へ」は同じ号に掲載されている。物語性の強い読み物に「岸なみ」、「千代ちゃん」への返信の形式をとる読書のすすめに「足立豊子」というように、筆名を使い分けたと推定する。

筆名の使い方を見ると、「足立豊子」を基本に用い、書き手自身の家族に関わる事柄が導入として利用されている記事、読み物、最後の記事に「岸なみ」を用いている。「足立豊子」の筆名には、『少女の友』の編集者であるという自覚がうかがえる。当初は家族に関わる記事の場合に「岸なみ」の筆名を用いたのであろうが、物書きとして自立する意思を持ち、「岸なみ」の筆名を用いるようになったのであろう。

以上をまとめると次のようになる。

- (a) 「岸なみ」、「足立豊子」の筆名による記事が『少女の友』に掲載された期間は、昭和22(1947)年4月から昭和23(1948)年10月までの1年7ヶ月である。
- (b) 『少女の友』の記事は、内容によって料理に関わるもの、美容と健康と身だしなみに関わるもの、読み物、読書のすすめに分けることができる。
- (c) 『少女の友』の編集者として「足立豊子」の筆名を基本に用いたが、家族に関わる記事を書いたときに用いた「岸なみ」の筆名を、物書きとして自立する意思を持ち、用いるようになったと考えられる。

4 岸なみと『伊豆の民話』

教材「たぬきの糸車」は、岸なみ編『伊豆の民話』(1957)収載の「たぬきの糸車」を、岸なみが1年生向けに再話し直したものである。その『伊豆の民話』の「はじめに」で岸なみは次のように記している。

太平洋の海の中に、ずんと片腕をのばしたような伊豆半島——伊豆の国は私にとっては代々の父祖の地でございます。

一族は、伊豆の国のそこそこに散らばり、生家は今も天城山麓にあって、私はここに生い立ちの思い出の数々を育ててまいりました。

ここにあつめました「伊豆の民話」は、まだ幼なかった日の明けくれに、祖父母、伯父伯母、話好きだった父、又、わが家の三代に涉ってすみつき馬おじいとよんでなつかしんだ老爺、小学生当時の恩師後藤健次先生など、いずれも、土着の誰彼からきかされたおさな夜がたりを、思い出ずるままにかきとめたノートから、このたび未来社の企画によって、かきあらためたものでございます。

『伊豆の民話』には「たぬきの糸車」を含めて55編の話が収載されている。「はじめに」によると、それらは岸なみが幼少期に周囲の人々から聞いた話を思い出して書きとめ、さらに書き改めたものである。後年、「民話と私」(『児童文芸』)の中で、書きとめた時期は十代の終わりころのことで、目的があったわけではないと書いている^(注13)。

それぞれの話の末尾には「原話 吉奈 松本某」のように、原話の話者に関わる情報が地名と

人名で紹介してある。そこで、全55編の話について、題名と典拠の別、地名、話者を一覧にして示す次のようになる。表中の*印は、記入の無いことを表す。

表3 『伊豆の民話』収載の話一覧

番号	地域	題名	典拠の別	地名	話者
1	*	伊豆の国焼き	*	*	*
2	北伊豆	お福と鬼(節分縁起)	原話	棚場	後藤健次
3	北伊豆	天狗の独楽 ^(こま)	原話	吉田	杉原佐久
4	北伊豆	手無仏 ^(てなしぼとけ)	原話	錦田村	故緒明なか
5	北伊豆	狩野 ^(かの) の泣き釜	原話	中狩野	狩野きち
6	北伊豆	河童の傷薬	原話	湯ガ島	故鈴木万吉
7	北伊豆	お汲み湯行事	原話	棚場	後藤健次
8	北伊豆	天狗の松	原話	月ガ瀬	故大川美啓
9	北伊豆	目一つ、角一本	原話	湯ガ島	故稲葉馬之助
10	北伊豆	餅売の罫 ^(おぼ)	原話	棚場	後藤健次
11	北伊豆	枯野船 ^(かるのふね)	原話	田中	故穂積忠
12	北伊豆	雛の夜ばやし	原話	湯ガ島	故足立くに
13	北伊豆	たぬきの糸車	原話	吉奈	松本某
14	北伊豆	河鹿 ^(かじか) の屏風	原話	湯ガ島	故足立誠一
15	北伊豆	あんばらやみの馬	原話	湯ガ島	故稲葉馬之助
16	北伊豆	あまんじゃく	原話	湯ガ島	故足立くに
17	北伊豆	日金 ^(ひがね) 山奇縁	原話	三島町	大沼せつ
18	北伊豆	日金山地獄	原話	棚場	後藤健次
19	北伊豆	名馬池月	原話	吉田	杉原佐久
20	北伊豆	狼の恩がえし	原話	金山	斎藤かね
21	北伊豆	乳 ^(ち) もらい柳	原話	湯ガ島	故足立喜久造
22	北伊豆	仙人みかん	原話	古宇	鈴木きち
23	北伊豆	ねずみの予言	原話	長野	故足立誠一
24	北伊豆	極楽もどり	原話	棚場	後藤健次
25	北伊豆	江間堤 ^(えまづつみ) の人柱	原話	三福	穂積みよ
26	北伊豆	地上げ坂	原話	棚場	後藤健次
27	北伊豆	山葵 ^(わさび) 沢の人喰蟹	原話	湯ガ島	故稲葉馬之助
28	北伊豆	たろ丸の話	原話	長野	故浅田けい
29	北伊豆	天狗のわび証文	*	*	*
30	北伊豆	浄蓮の滝の女郎ぐも	豆州古葉	*	*
31	北伊豆	天狗平 ^(てんぐたいら)	*	*	*
32	北伊豆	鮎 ^(まふ) の湯由来	豆州寺社縁起	*	*
33	北伊豆	八丁池の大鹿	伊豆日志	*	*
34	北伊豆	木太刀 ^(きたち) の湯	*	*	*
35	北伊豆	施行平 ^(せぎょうだい)	*	*	*
36	南伊豆	大きい太鼓	原話	湯ガ島	故足立東一
37	南伊豆	称念寺縁起 ^(しょうねんじえんぎ)	原話	棚場	後藤健次
38	南伊豆	栗の長者	原話	川奈	石井節三
39	南伊豆	天人女房	原話	新田	後藤よね
40	南伊豆	かっぱのかめ	原話	谷津	中村正子
41	南伊豆	みにくい顔のお地蔵さま	原話	下田町	石田しず
42	南伊豆	小鳥精進、酒精進	原話	棚場	後藤健次
43	南伊豆	狸和尚	原話	下河津	黒田はち
44	南伊豆	姉妹富士	原話	下田町	石田しず
45	南伊豆	鬼女の手形	原話	長野	故浅田けい
46	南伊豆	富戸 ^(ふと) の海坊主	原話	富戸	石井音江
47	南伊豆	二つの月	原話	湯ガ島	故足立東一
48	南伊豆	乾龍の小箱	原話	棚場	後藤健次
49	南伊豆	猫南瓜 ^(ねこかぼちゃ)	原話	西浦	渡辺つる江
50	南伊豆	伊豆いこう	原話	錦田	故緒明なか
51	南伊豆	対島 ^(たいじま) の赤牛	原話	川奈	故石井節三
52	南伊豆	ひっぱり焼きの十左衛門	原話	川奈	故石井節三
53	南伊豆	大挽きの善六	原話	湯ガ島	足立坦
54	南伊豆	田子の島ひき	*	*	*
55	南伊豆	長津呂 ^(ながつろ) のかくれ里	南豆古葉	*	*

これらは、いずれも土地の暮らしに関わる内容を扱っているが、日本の歴史に名の残る人物や、地名の由来や寺社の縁起を前面に取り上げたものもある。たとえば、源頼朝に関わるものとして10番「餅売の媼」・19番「名馬池月」が挙げられる。10番は餅売りの老女と頼朝の交流を描き、成願寺の縁起にも成っている。19番は宇治川の先陣争いで有名な名馬池月と頼朝の出会いを描いている。地名の由来として1番「伊豆の国焼き」・35番「施行平」が挙げられる。1番は伊豆の国産みの話で、地名を順に挙げていく。35番は箱根の難所を越える馬をねぎらうという地名の由来を述べる。寺社の縁起として37番「称念寺縁起」・42番「小鳥精進、酒精進」が挙げられる。37番は文会という彫刻師が彫った仏像を、曾我兄弟の父が手に入れ、寺を設けて持仏としたことを述べる。42番は河津来宮神社の祭神杉杵別命が、泥酔して野火に遭い、小鳥に助けられたことで、禁酒・禁猟の神事を行っていることを述べる。

『伊豆の民話』では伊豆の地名を挙げているが、伊豆という地域に限らず、他の地域にも同様の話型が伝承されているものもある。たとえば、6番「河童の傷薬」・20番「狼の恩がえし」・49番「猫南瓜」は、稲田浩二・稲田和子編『日本昔話ハンドブック』の「日本昔話200選」に見える「河童の話」・「狼の守護」・「猫とかぼちゃ」に相当する^(注14)。

『伊豆の民話』の収載方法に関して、岸なみは「はじめに」で次のように書いている。

伊豆はその国柄から、古くより数多くの物語に富み、上古枯野船のかた、船にゆかりの多い土地柄から、船にまつわる船怪談や、ことに頼朝流謫以来、半島の至るところは、源氏の史話で埋められ、又維新開国に因んでは、ベルリヤ、吉田松陰、唐人お吉の伝説や、温泉情話など、数えきれないほどでございます。

これらのからみあった史話伝説と、民話とを、どの線で分かつかということについては、学者ならぬ私には定見ありませんし、私の採集ノートが童話として再話したい意図のもとに収集したものが中心であるため、話の内容にも自然とそういう制約がはたらいているのを否認しません。

ここでは、岸なみが「童話として再話したい意図」を持っていたことが確認できる。前述したように、類似の昔話との比較を通してみると、「たぬきの糸車」で糸を束ねるたぬきの様子をおかみさんが見る行為は、おかみさん自身の、過去から未来に渡る生を自己肯定的に確認する行為である。しかし、岸なみにとって、『伊豆の民話』はいろり端で語り継がれ聞き継がれ、人々の笑いを呼んだ昔話であり、「郷愁の文学」であった。そのことが「民話と私」(『児童文芸』)の中で述べられている。昔話の位置づけにさしたる関心があったわけではない^(注15)。再話の時点で子どものための物語を意図したのであり、教材に再話し直したときには、その意図が達成されているといえよう。

以上をまとめると次のようになる。

- (a) 『伊豆の民話』に収載された話は、岸なみが幼少期に周囲の人々から聞いた話を思い出して十代の終わりに書きとめ、その後書き改めたものである。
- (b) 『伊豆の民話』は岸なみにとって「郷愁の文学」であり、昔話の位置づけにさしたる関心があったわけではない。
- (c) 『伊豆の民話』は岸なみが「童話として再話したい意図」を持って収集したものであり、教材「たぬきの糸車」に再話し直したときには、その意図が達成されているといえよう。

5 岸なみと郷里の人々

5. 1 原話の話者との関係

『伊豆の民話』収載話55編の話者の中には、岸なみとの人間関係が示されているものが何編もある。岸なみは「はじめに」の冒頭で話者として「祖父母、伯父伯母、話好きだった父、又、わが家の三代に涉ってすみつき馬おじいとよんでなつかしんだ老爺、小学生当時の恩師後藤健次先生」を列挙した。それに加え、民話の題名と関わらせて次のように書いている。

枯枝に鮮花をかざって春をまちつつ「雛の夜ばなし」を語ってくれた祖母、伊豆なまりもなつかしく「ねずみ^マ予言」におどけた祖父、一本も歯のないほら穴のような口から、もがもがと「あんばらやみの馬」を話してくれた馬おじい、「乳もらい柳」の語り手のひげの大伯父、「河鹿^マ屏風」の河鹿の水ずく足あとが、今そこにあるような話しぶりの父など、今ではもうみな、伊豆の国の土になってしまいました。

これらを手がかりにして人間関係を整理すると次のようになる。

表 4 原話の話者との人間関係

番号	題名	地名	名前	関係
2	お福と鬼	棚場	後藤健次	小学校恩師
12	雛の夜ばやし	湯ガ島	故 足立くに	祖母
14	河鹿の屏風	湯ガ島	故 足立誠一	父
15	あんばらやみの馬	湯ガ島	故 稲葉馬之助	三代にわたり住み着いた老爺
21	乳もらい柳	湯ガ島	故 足立喜久造	大伯父
23	ねずみの予言	長野	故 足立誠一	祖父

前述したように、岸なみは『少女の友』の編集者として「足立豊子」の筆名を使っていた。この表から岸なみは「湯ガ島」の「足立」家の出身と考えられる。しかし、この表を見ると奇妙な感覚に陥る。それは父と祖父が地名は異なるのに同姓同名になっていることによる。地名の「長野」は「湯ガ島」に隣接する地域で、現在の伊豆市湯ヶ島長野地域に相当する。この地域の住民はほとんどが浅田姓である^(注16)。話者の地名あるいは名前に何らかの操作が加えられていると推察される。

ところで、伊豆市湯ヶ島は井上靖が少年期を過ごし、「しろばんば」の舞台になった場所である。また、川端康成が長く逗留し、「伊豆の踊子」の原型になるものが書かれた場所である。その湯ヶ島の熊野山にある共同墓地には、井上靖の墓碑が存在する。そして、ここに「足立家之墓」と書かれた墓石が多く立ち並んでいる。その中でも「足立本家」がひとときわ大きい区画を持つ。そこに「足立誠一」「足立くに」の名前が存在し、2人の名前は同じ墓石に並んで刻まれている。没年、享年から夫婦と考えられる。また、「足立誠一」は「足立清次郎長子」とある^(注17)。

同じ「足立本家」の区画には、『伊豆の民話』に見られる他の話者「足立東一」「足立坦」の名前も存在する。「足立東一」は「足立清次郎五子」、「足立坦」は「足立誠一長子」とある^(注18)。「足立東一」は表3で36番・47番の原話の話者「湯ガ島 故足立東一」にあたる。また、「足立坦」は53番の原話の話者「湯ガ島 足立坦」にあたる。ただし、「足立坦」は『伊豆の民話』刊行当時、既に故人になっているが、「故」が脱落している。この人物は湯ヶ島郵便局長を勤め、川端康成に基を仕込んだ人でもある^(注19)。

「足立本家」の墓碑をもとに、原話の話者の関係を整理すると次のようになる。

足立誠一と足立東一は兄弟である。

足立誠一と足立くには夫婦である。

足立誠一と足立坦は親子である。

原話の話者たちは湯ヶ島の足立家の人々をはじめとして、足立家に縁のある人々や伊豆で関わった人々である。岸なみと血縁・地縁において深く繋がる人々である。

5. 2 弟

『少女の友』の⑨番「手を美しく」の導入部分には「私」の「弟」が登場する。湯ヶ島で出会った方に岸なみの弟の墓の位置を教えていただいた。それは井上靖の墓所の近く、戦没者の慰霊墓地の中に存在した。弟は「足立市之助」という。昭和19（1944）年8月19日に、バシー海峡で魚雷攻撃を受けて戦死した旨が刻まれている^(注20)。

バシー海峡は台湾南部とフィリピン北部のバタン諸島との間にある。将兵を護送し、船員も含めて約4800人が乗船していた玉津丸が、昭和19年8月19日にこの海峡で魚雷攻撃を受けて沈没した。生存者はほんのわずかである^(注21)。岸なみの弟「足立市之助」は、バシー海峡に沈み、その身は日本に帰らなかった。

『少女の友』の⑨番「手を美しく」で「私」と「弟」は次のように書かれている。やや長くなるが引用する。

何年かまえ、私にはまだお母さんがありました。戦争に行つて今は死んだことになっている弟も、まだ小さい少年でした。

お母さんは柚子の実が庭先に匂うようになって、起き上がつてそのふかい秋をたのしむことも出来ない長い病氣でした。

私も弟もお母さんの病床から学校へ通い、お母さんの看護をしてくれるお手伝いさんもその長い病氣にあきて、何人ともなく変わりました。そうしたころのある日、またお手伝いの人が変つて次の人がくる迄の間、私はお母さんのおかゆをたき、牛乳をあたため、弟のお弁当もつめ、そして朝は早くから、かまどにたく薪を割りました。

小さい幼い弟の手が、その薪を束ねました。それから三人そろつて朝の食事をいただくのでした。もうずいぶん寒くなっていました。学校へゆく仕度をして枕元へ“いつてまいります”を申しに弟と二人並びますと、お母さんが何時もは目顔で笑つてみせてくれるのです。に、その時は何だかさみしい顔で、じつと、ひざにおいた私の手と弟の手をみているのです。私は思わずはつと思つて、自分の手と弟の手をみくらべました。

弟の手も、私の手も、しもやけが出来かかった上にひびがきれて血がにじんでいました。

この文章がどれほど事実を伝えているかを確認するのはむずかしいが、全くの創作ではなく、過去の経験に基づいて述べていると考えられる。この文章が載った昭和23（1948）年2月の時点で、岸なみは弟のことを「戦争に行つて今は死んだことになっている」と書いた。戦死した弟の身は日本に帰らなかった。岸なみは、弟の身が帰らなかったことで、「死んだことになっている」弟の帰還に、一縷の望みを持っていたのではないだろうか。そして、母と弟と固く繋がって暮らした昔日を回顧したのであろうと推量する。

戦争と結びつけて、岸なみは昭和41（1966）年発行の翻訳書『王女ナスカ』の「解説」で、弟のことに触れている。

わたしが、はじめてこの古びた原書を読んだのは、第二次世界大戦がおわってまもなく、東京では、まだ空襲の焼けあともなまなましいころのことでした。

いまでは、歴史となってしまった、あの東京裁判が市谷軍事法廷におわろうとしており、日本じゅうの、いや世界じゅうの人たちが、なんらかのかたちで、みな戦争によって、きずっていた時代でもありました。わたし自身も、この戦争で、たったひとりの弟を戦死させていました。

「解説」はこの後、平和を願う内容へと展開する。時間の経過の中で心の整理がついてきたのであろう、「戦争に行つて今は死んだことになっている」弟であったが、「戦死させ」た弟へと表現が変わっている。

6 教材「たぬきの糸車」の読みの可能性

ここでは、「さびしさ」と「たぬきの手の動き」に着目して述べる。

『伊豆の民話』収載「たぬきの糸車」（以下、伊豆版）では、山奥のさびしさが強調されている。しかし、教材「たぬきの糸車」（以下、教材版）では、その部分が削られている。以下に伊豆版を引用して示す。〔 〕内に内容を補う。

- ・ [初めてたぬきが現れた場面で] 人里離れたふかい山奥の静けさは、人間でなくてもさびしかったのでしょうか、
- ・ [糸車を回すまねをするたぬきの影を見て、おかみさんは] 山奥のさびしいくらしにそんな風なあいきょうをみせてくれるたぬきを、にくめなくなってきました。
- ・ [おかみさんが、わなにかかったたぬきを見て] うらさびしい山家のくらしでは、たぬきでさえも親しいものに思えます。

岸なみが原話を思い出して十代の終わりに書きとめたとき、このさびしさをどのように捉えたかは知る由もない。しかし、その後伊豆版に書き改めたとき、誰かがあるいは何かを恋い求めるさびしさとして描いている。おかみさんのさびしさを埋めたのは、たぬきの出現であった。そして、教材版に書き改めたとき、「さびしい」という表現は削られたが、恋い求めるさびしさは、おかみさんとたぬきとの心の交流を前面に出す形に置き換えられたと考える。

ところで、伊豆版に比べて、教材版では分量が減ったため、たぬきの糸回しをする描写がクローズアップされている。その部分を以下に平成27年度版により引用して示す。

- ・ たぬきは、まいばん まいばん やって きて、糸車を まわす まねを くりかえしました。
- ・ [春になって帰って来ると、板の間には糸の束が積んであった。おかみさんが] そっとのぞくと、いつかの たぬきが、じょうずな 手つきで、糸を つむいで いるのでした。たぬきは、つむぎおわると、こんどは、いつも おかみさんが して いたとおりに、たばねて わきに つみかさねました。

これらのたぬきの描写で印象深いのは、たぬきの手の動きである。たぬきの手は糸車を回し、糸を紡ぎ、糸を束ねて積み重ねる。そして、このたぬきの手の動きが『少女の友』の⑨番「手を美しく」の「弟」の手の描写に重なって見える。

私はお母さんのおかゆをたき、牛乳をあたため、弟のお弁当もつめ、そして朝は早くから、かまどにたく薪を割りました。

小さい幼い弟の手が、その薪を束ねました。

姉の「私」を「弟の手」が助ける。その「弟の手」を「私」はよく記憶していたのである。

弟の手も、私の手も、しもやけが出来かかった上にひびがきれて血がにじんでいました。

日々の暮らしを紡ぐため、しもやけが出来かかった手は、「お母さん」を「さみしい顔」にさせる手であり、そのことを「私」は悲しく思った。『少女の友』の⑨番「手を美しく」の主旨はお母さんの心をいためないように手を美しく保つことにある。しかし、「私」は「小さい幼い弟」に対しても、十分な配慮をしてやれず悲しい思いを持ち、「私」を助ける「弟の手」の記憶を深く心に刻んだことであろう。手の記憶は家族が密接に寄り添った日々を蘇らせる入り口である。

「たぬきの糸車」を昔話の型で分類すると動物報恩譚になる。この話では障子をはさんで向こう側にたぬきが、こちら側におかみさんが配置されている。障子を境界にして異界にいるたぬきが、日常生活の場で糸車を回すおかみさんのしぐさを見てまねることで関わりを持つ。糸車を回すのは夜なべ仕事であり、夜は時間的異界である。わなに掛かったたぬきが、おかみさんに逃がしてもらったのも夜のことであった。その後は境界が移動して、たぬきは伊豆版では座敷で、教材版では板の間で糸を紡ぐ。そして、白い糸の束を人に残して帰って行くという幸福な結末を迎える^(注22)。前述したように、『伊豆の民話』は岸なみが「童話として再話したい意図」を持って収集したもので、昔話の位置づけに関心があったわけではない。それゆえ、昔話が生まれる時の人間の意識には、やはり関心があったわけではなかろう。しかし、異界から境界を移して現れ、おかみさんに幸福を残して去って行くたぬきに、帰還を待ち望んでいた弟を重ねたとしても不思議ではない。

『少女の友』の⑨番「手を美しく」の発表は昭和23（1948）年2月である。このとき、岸なみは弟のことを「戦争に行つて今は死んだことになっている」と書いた。墓が建ったのは昭和27（1953）年、『伊豆の民話』の発行は昭和32（1957）年、「たったひとりの弟を戦死させ」と「解説」に書いた『王女ナスカ』の発行は昭和41（1966）年、「たぬきの糸車」が教材となったのは昭和52（1977）年である。時間の経過の中で、弟を待つ心の整理もついていったであろう。

教育現場における読みとして1章の（a）が適切であると考ええる。その上で、一つの読みの可能性を示すことにする。岸なみは、物語の世界で、待っても帰らぬ弟を、たぬきに仮託して異界から帰還させた。たぬきはおかみさんと心を通わせ、おかみさんに幸福を残して帰って行った。この読みの可能性は、編集者から再話者・翻訳者に至る岸なみの活動や、郷里の人々と関わらせることで見えてきたものである。

7 おわりに

岸なみに関しては、現在概略ほどのことしか紹介されていない。そこで、まず岸なみの活動を記述し、次にその活動や郷里の人々と関わらせることで見えてくる、教材「たぬきの糸車」の読みの可能性を提示した。それをまとめると、次のようである。

- （a）雑誌『少女の友』の編集者から、「こまどり書苑」の発行者、再話者・翻訳者に至る時期に、岸なみは良質な作品を少女に提供することで「深い教養と高貴な希望と大きな幸福を与えようと」志した。
- （b）雑誌『少女の友』の編集者として、初期には「足立豊子」の筆名を基本に用いたが、家族に関わる記事を書いたときに用いた「岸なみ」の筆名を、物書きとして自立する意思を持ち、用いるようになった。
- （c）『伊豆の民話』は岸なみにとって「郷愁の文学」であった。『伊豆の民話』は岸なみが「童

話として再話したい意図」を持って収集したものであり、教材「たぬきの糸車」に再話し直したときには、その意図が達成されているといえる。

- (d) 教育現場における読みとして、たぬきの報恩を後退させ、おかみさんとたぬきの心の交流を前面に出すのは適切であると考ええる。その上で、岸なみの活動や、郷里の人々と関わらせることで見えてくる、読みの可能性を示すと、次のようになる。——たぬきの手の動きは弟の手の描写に重なり、家族が密接に寄り添った日々を蘇らせる。岸なみは、物語の世界で、待っても帰らぬ戦死した弟を、たぬきに仮託して異界から帰還させた。たぬきはおかみさんと心を通わせ、おかみさんに幸福を残して去って行った。

〈注 記〉

- 注1 光村図書(2015)の「たぬきの糸車」の「出典」による。
- 注2 ホームページ光村図書の教科書クロニクルで確認できる。
- 注3 竹内隆(2001)、萩中奈穂美(2008)など。
- 注4 秋枝美保(2001)は河合隼雄(1982)の指摘を「糸、及び糸を紡ぐという行為を女性、特に母性の肯定的・否定的両面の象徴だとしている。」と示し、教科書版「たぬきの糸車」を「女性の意識の統合」が行われたものと述べる。
- 注5 『日本児童文学大事典』における「岸なみ」の項の筆者は引原直美である。新聞記事は朝日新聞社・日本経済新聞などの2015年8月の訃報記事である。
- 注6 『黄金の河の王様』は、国立国会図書館デジタルコレクションを閲覧した。「はしがき」ではラスキン学者の御木本隆三にも言及している。
- 注7 岸なみ(1977)では、この翻訳書がロンドンのラスキンギャラリーに永久保存されたことを報告している。
- 注8 「こまどり書苑」から発行された3本は、国立国会図書館デジタルコレクションを閲覧した。
- 注9 『児童文学事典』の「少女の友」の項(筆者は遠藤寛子)の説明に基づく。ただし、この説明では「戦時体制強化の42年前半まで続いた。戦後は」とあり、発行を一時中断したように読み取れるが、『少女の友』は継続して発行されている。
- 注10 『児童文学者人名事典』の「岸なみ」の項の記事に基づく。
- 注11 雑誌『少女の友』は、石川武美記念図書館、日本近代文学館、及び国立国会図書館で閲覧した。
- 注12 目次では「楽しいお八つの作り方・みつ豆」とあるが、記事の題目では「お八つ」の部分がお八になっている。また、目次には「足立豊子」の筆名があるが、この記事が裏表紙裏にあるという場所による紙数の制約をうけているためか、記事では無記名になっている。
- 注13 岸なみ(1976)の中で、「古いきき語りをノートしはじめたのは、十代の終りころのことで、目的があってメモしたのではないから、忘れてしまっている話もあり、半分しりきりとんぼになったのもあった。」と書いている。
- 注14 これらの話は、『伊豆の民話』と同じ「日本の民話」シリーズの別の巻でも確認できる。6番「河童の傷薬」は『甲斐の民話』に「河童のきずぐすり」の題で、20番「狼の恩がえし」は『みちのくの民話』に「嘉右衛門山の神」の題で、49番「猫南瓜」は『屋久島の民話 第二集』に「猫とカボチャ」の題で載っている。
- 注15 岸なみ(1976)の中で、「みんなが話ずきで、語るのも好き、聞くのも好き、まだ民話などとはいわない昔話は、いつもいろいろ端で笑いをよんだ。」「私にとって『伊豆の民話』は郷愁の文学である。」「民話とよばれるようになった昔話の位置づけなどと、むずかしいことはわからない。」「いろいろの語りを、その雰囲気や、郷土色を、大切に次代の人たちにのこしたいという、望郷のあふれるような思いがある。」と書いている。
- 注16 関東農政局のホームページに「棚田百選の認定」がある。その「荒原の棚田」【静岡県】の地域の概

要に次のように紹介されている。「住民のほとんどが浅田姓であるため、各戸屋号をもって呼ばれており、その屋号から江戸末期に各戸が従事した職業の一部がうかがわれる。」ホームページ閲覧は2016年4月。

- 注17 墓石正面に「光徳院智瑤萬城居士、全徳院明照紗邦大姉」、側面に「諱 誠一 足立清次郎長子 号萬城 昭和八年四月十八日歿 享年八十二」、「足立くに 昭和十六年六月二十五日歿ス 享年八十三」とある。
- 注18 前者は墓石正面に「東嶽院義仙道光居士」、側面に「諱 東一 足立清次郎五子也 大正十一年二月八日歿 享年五十有三歳」とある。後者は墓石正面に「淳徳院歸來坦嶺居士」、側面に「諱 坦 号歸來 足立誠一長子 大正十三年十二月十四日歿 享年四十有九歳」とある。
- 注19 道の駅「天城越え」にある昭和の森会館内、伊豆近代文学博物館における展示説明に「川端康成に暮を仕込んだ人。二代目の湯ヶ島郵便局長さん。息子の務さんとともに、文学者たちと親交があつかった。」とある（入館見学は2016年3月）。川端康成は『伊豆の旅』所収『『伊豆の踊子』の装幀その他』で暮仲間として、「郵便局長の足立さん」「郵便局のおじいさん」をあげている。執筆時期から判断すると、前者が足立務、後者が足立誠一にあたる。また、同所収「若山牧水氏と湯ヶ島温泉」で花見の宴のくだりに「先代の郵便局長」「局長の息子さん」が出てくる。それぞれ足立坦、足立務にあたる。三代にわたり、川端康成と交流があった。
- 注20 墓石正面に「陸軍兵長足立市之助之墓 自照院武揚貫忠居士」、側面に「昭和十九年八月十九日 パシー海峡に於て魚雷攻撃を受け戦死 享年三十才」とある。
- 注21 野間恒（2002）を参照した。
- 注22 「たぬきの糸車」を異界と現実世界との関係で捉えたものに秋枝美保（2001）・亀井久美子（2016）がある。

〈参考文献〉

- 秋枝美保（2001）「『たぬきの糸車』における女性の意識の統合について」『文学の力×教材の力』小学校編1年 教育出版
- 稲田浩二・稲田和子編（2010）『日本昔話ハンドブック新版』三省堂
- 江間章子（1949）『乙女のよろこび』こまどり書苑
- 大阪国際日本児童文学館編（1993）『日本児童文学大事典』大日本図書
- 甲斐睦朗・高木まさき他編（2015）『こくご 一』下 光村図書出版
- 亀井久美子（2016）「教材『たぬきの糸車』（光村一年下）と出典『伊豆の民話』の異界から」『国文学論叢』第61輯 龍谷大学国文学会
- 河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』岩波書店
- 川端康成（1981）『伊豆の旅』中央公論新社
- 岸なみ編（1957）『伊豆の民話』日本の民話4 未来社
- 岸なみ（1976）「民話と私」『児童文芸』22巻11号 日本児童文芸家協会
- 岸なみ（1977）「近況のおしらせ」『児童文芸』23巻13号 日本児童文芸家協会
- 実業之日本社編（1947～1948）『少女の友』40巻4号～41巻10号 実業之日本社
- 下野敏見編（1965）『屋久島の民話 第二集』日本の民話38 未来社
- スターリング作・岸なみ訳（1966）『王女ナスカ』講談社
- 竹内隆（2001）「民話の世界との交流―『たぬきの糸車』と子供たち」『文学の力×教材の力』小学校編1年 教育出版
- 東北農山漁村文化協会編（1956）『みちのくの民話』日本の民話 別巻1 未来社
- ドッジ原作・中村妙子訳（1948）『銀のスケート』こまどり書苑
- 土橋里木編（1959）『甲斐の民話』日本の民話17 未来社
- 中西敏夫編（1998）『児童文学者人名事典』日本人篇 上 出版文化研究会
- 日本児童文学学会編（1998）『児童文学事典』東京書籍

野間恒（2002）『商船が語る太平洋戦争—商船三井戦時船史』私家版

萩中奈穂美（2008）「岸なみ「たぬきの糸車」教材論的一考察—原話との比較を通して—」『国語国文』第35号 富山大学国語教育学会

本郷真（1948）『オオレリヤの花束』こまどり書苑

光村図書（2015）『小学校国語 学習指導書』1年 光村図書出版

ラスキン作・岸なみ訳（1950）『黄金の河の王様』中央公論社